



ワークキャンプという ハイY活動があった

大澤 英二

Osawa Eiji

前山梨YMCA理事長
元山梨YMCA総主事
元山梨県ボランティア協会会長
元山梨いのちの電話理事長

▼戦後の高校生とハイYという活動の出会い

太平洋戦争中の教育により、すっかり軍国少年として育った私でしたが、戦後の民主主義教育、とりわけ旧制中学から新制高校へ移行したばかりの甲府一高での学生生活は、大変明るい希望に満ちたものに映ったのでした。とりわけ、今から思うとよく公立高校で開催出来たと言える、かの賀川豊彦による全校生へのキリスト教講演会とその直後に決心カードを提出した私には、新しい日本の到来とイエスキリストとの出会いを強烈に印象付けられたのです。

近藤兵庫という熱心なクリスチャン校長の後押しもあって、1948年9月に甲府一高に誕生したハイY活動は、程無く全県下のほとんどの高校に広まり、山梨は全国のYMCAからもハイY王国と言われるようになったのでした。

聖書研究、ボランティア活動（もちろん当時はまだボランティアという言葉は日本では無かったが）、様々な討論会などの活動も楽しいものでしたが、あれほど山梨県の高校生たちをハイYに引き付けたのは、何と言ってもワークキャンプの存在でした。

▼ワークキャンプに出会ってから

1949年7月、当時無給の初代山梨YMCA総主事・桑島一郎は、終戦によって満州への派遣が行われなかった青雲青年開拓団の、山梨県北巨摩郡清春村での開拓活動の苦闘と絶望的になりがちな日常を聞き、ハイYに呼び掛けてワークキャンプを始めたのでした。第一次世界大戦後のヨーロッパの荒廃を復興すべく始まったワークキャンプのスタイルを、太平洋戦争後の大きな痛手を様々な形で負っていた日本に当てはめていったのです。開拓部落の決して立派ではない建物に泊まり込み、色んな高校から夏休みに集まってきた学生たちが、生活を共にしながら労働や話し合い、聖書研究とレクリエーションに打ち込む毎日は、多感な高校生たちの心をしっかりとつかんで離さないものとなりました。

当時の記憶をたどると、朝5時に起床、5時半の朝拝、約8時間の労働（開墾、畑仕事、道路拡張、等）、夕べの祈り、夜の修養・娯楽、9時消灯が日々の流れでありました。村の子どもたちと遊んだり勉強を教えることもあり、大変きつかった作業と相まって本当に記憶に残るものでした。

4年間続いたワークキャンプは、その後山梨県北の瑞牆山ふもとにあった戦災孤児収容の天使園に場所を移して15年続きました。最盛期にはひと夏に150名近くの高校生が、何班にも分かれて交代で行われたワークキャンプは、どうしてそんなにも高校生たちの心をつかんだのでしょうか。



▼ハイYワークキャンプの根幹をなすもの

まず言えるのは、自由な雰囲気のもとに行われた高校生の自主性に任された運営にあったと思われます。指導者たちが安全やキャンプ全般に非常に気を配りつつ、キャンプそのものは自分たちに任されているという意識と自覚が、自分たちの創り出すキャンプという組織教育キャンプの形を作っていたのでしょう。また、社会的に様々な問題を抱えていた戦後期の、特に戦災孤児などとの実際の触れ合いが、不条理とも思える現実社会の中で、いかに弱くされている人々と共に生きてゆくかの思いを、しっかりと若者の心に芽生えさせたのでした。

多様な高校からの参加者との触れ合いも、大きな刺激でした。様々な考えを持った同世代の男女の行動や真剣な話し合い、教師やキリスト教会牧師、先輩大学生リーダーたちが行動と背中を示す指針などが、互いの違いを認め合って一方的な考えを押し付けない方向性を育てていったのです。教会に結び付いた者、参加者同士で結婚した者、当時はまだ少なかった福祉関係方面に進んだ者、等々様々な形がありましたが、私はこのワークキャンプとハイ Y に強烈にとらわれて、山梨 Y M C A の専任職員となりました。



1970 年代頃から、進学競争・学園紛争・その他の理由により急速にワークキャンプは開催が困難となり、1980 年代にはハイ Y 活動も消滅してしまいましたが、Y M C A キャンプの一つの形を確かに形作った、ハイ Y ワークキャンプで育った多くの人々がいることを、ここにもう一度覚えたいと思います。

Profile

1933 年 甲府市生まれ。
1948 年 甲府一高ハイ Y 入会（高校一年）
1952 年 山梨 Y M C A 入職
1960 年 山梨 Y M C A 総主事就任
2015 年 山梨 Y M C A 理事長就任
2020 年 山梨 Y M C A 理事長退任
2020 年 11 月 逝去



【取材：山梨 Y M C A 総主事 露木淳司】